トランスナショナルな移動に伴う埋葬地選択と家族
――日本のムスリムを事例として――

○本多真隆（立教大学）・岡井宏文（京都産業大学）

○問題の所在

グローバル化の進行にともない、国内外の家族研究においては、移民と関連した諸現象についての関心が高まっている。日本においても、1980～90 年代のニューカマーの移住や国内の人口減少を背景とした国際結婚、子育て、ケア人材の確保などが着目されている。

近年では、こうしたニューカマーの定住と連動して、新たな問題も浮上している。端的にいえば、移住者の高齢化に伴う諸問題である。高齢期の移住者を取りまく社会保障やケア、そして「死」にまつわる問題は、すでにこうした現象が先行して発生している欧州においては一定の研究の蓄積がある。しかし日本国内においては、現在進行中の問題であり、研究も発展途上にあるといえよう（新倉 2024 など)。

本報告では、こうしたニューカマー第一世代をとりまく問題のなかでも「死」、特に埋葬地選択に関する問題を取り扱う。埋葬地選択は、移民が母国で慣れ親しんできた慣習や宗教的背景だけでなく、経済的事情、そして母国と移住国の家族の問題が関わってくる。Hunter らも述べるように、「死は移民の家族とコミュニティの定住プロセスにおける重要な分岐点」なのである（Hunter et al, (eds)2017)。

○対象と方法

本報告では、こうした埋葬地選択をめぐる問題について、日本のムスリムを事例とする。日本のムスリム人口は、1980 年代以降の労働力不足を背景としたニューカマーの来日と共に急増した。2019 年現在の日本のムスリム人口は、約 23 万人と推計されており、このうち 18.3 万人が外国籍、4.6 万人が日本国籍である。外国人の出身地は、東南アジア、南アジア、アラブ諸国など、多国籍からなる（店田 2021)。

日本のムスリム人口の特徴に、外国人ムスリムの男性比率の高さ（性比の不均衡）と国際結婚比率の高さがある（工藤 2015)。日本人ムスリムは、国際結婚を契機とする改宗、子ども・若者世代（25 歳以下）の増加、その他の理由による改宗、帰化などの要因によって増加したとされる。

現在、ムスリムコミュニティでは、高齢化と「死」を巡る問題が浮上している。モスクでは、葬儀の執行（遺体の湯灌、納棺、儀礼、出身国等への送還、遺族との交渉など）のほか、設備・施設整備（湯灌スペースの新築・増築、（火葬が厭われるため）土葬可能墓地の取得）などの活動が行われている。本報告では、2022 年 3 月から 2024 年 5 月にかけて関東と東海地方に位置するモスクの代表者へのインタビューをもとに、コミュニティにおける「死」に関連する活動実態を捉えた上で、埋葬地選択の要因を整理する。

○議論

本報告で取り上げる事例は、巨視的にいえば、グローバル化の進行にともなう多文化共生、そして「家族」の多様化の一側面である。埋葬地選択には、移住者の宗教的背景だけでなく、移住者を取りまく母国および移住先での家族の問題が介在してくる。

本報告はモスクの対応をはじめとした事例報告がメインとなるが、日本の埋葬地選択や墓問題、そしてその背景にある家族観や家族変動との接続についても議論したい。

○参考文献

Hunter, Alistair., and Eva Soom Ammann (eds.), 2017 *Final Journeys: Migrant End-of-life Care and Rituals in Europe*, London: Routledge.

工藤正子, 2015, 「在日ムスリム社会のダイナミクス」『アステイオン』83:90-104.

新倉久乃, 2024, 『在日タイ女性の高齢期と脆弱性――トランスナショナルな社会空間と埋め込まれたジェンダー規範』明石書店.

店田廣文, 2021, 『世界と日本のムスリム人口 2019/2020 年』多民族多世代社会研究所.

キーワード：移民、埋葬地選択、ムスリム